



Title	イーゴリ遠征譚（訳及註）
Author(s)	木村, 彰一; Kimura, Shoichi
Citation	スラヴ研究, 1, 1-7
Issue Date	1957
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4923
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112864.pdf



イーゴリ遠征譚

木村彰一訳

まえがき

ここにかけける「イーゴリ遠征譚」《Slovo o polku Igoreve》の試訳¹⁾は、著名なスラヴィスト Roman Jakobson が、1948年に、ビザンツ学者 Henri Grégoire、歴史家 Marc Szeftel と協力して、ニューヨークで出した校訂本のテキストによったもので、「節」(《verse》)のわけかたや番号づけもこの本のをそのまま踏襲しました。本の表題は次のとおりです：La Geste du Prince Igor'. Annuaire de l'Institut de Philologie et Histoire Orientales et Slaves, t. VIII (Ecole Libre de Hautes Etudes à New York 及び Université Libre de Bruxelles)。ただし Jakobson の校訂したテキスト (pp. 38—78) は、R. Poggioli のイタリア語との対訳本 Cantare della gesta di Igor (Giulio Einaudi editore, 1954) にも、apparatus criticus だけをのぞいてそのまま収められていますが (pp. 88—196)、両者の間にはほんのわずかながら異同がありますので、そういう場合には出版年代の新しいイタリア語対訳本のテキストの方を採用したことをおことわりしておきます。

Jakobson たちの La Geste は、おそらくある種の政治的理由から、ソヴェートの学界ではあまり問題にされていないようですが²⁾、これが今までに出た多くの「イーゴリ遠征譚」の研究の中でも出色のものの一つであることはたしかです。周知のように、元来はフランスの André Mazon の「イーゴリ遠征譚」疑作説³⁾にこたえるために準備されたものですが、ここに収められた Jakobson の劃期的な研究論文《L'authenticité du Slovo》は、するどい詩人的な直観と、稀にみる豊富な学殖を従横に駆使して、従来疑問とされた多くの箇所独自の新しい解釈を下し、これによって Mazon のもともと根拠薄弱な説を完膚ないまでに打ち破ったのでした。Jakobson の解釈のあるものに対してはもちろん異論もあることでしょうが⁴⁾、そのひとつひとつが今後の古代ロシア研究の進展に応じて十分に考慮される価値があることは、La Geste の学問的な水準の高さからいって疑いのないところであると思われま

- 1) ここにのせるのは全体の約三分の一弱で、残りはこの雑誌の次の号に出るはずになっていません。
- 2) さいきんポーランドで出版された Słowo o wyprawie Igora, w opracowaniu A. Obrębskiej-Jabłońskiej, Warszawa, 1954 ではかなり広範囲に利用されています。
- 3) A. Mazon, Le Slovo d'Igor (I—IV), Paris, 1940, 及び Le Slovo d'Igor (V—VI), Revue des Etudes Slaves, XXI, 1944, 5—45 を参照のこと。なお R. Jakobson, The Puzzles of the Igor' Tale on the 150th Anniversary of its First Edition, "Speculum", Vol. XXVII, No 1, 43 ff., Cambridge, Mass., 1952 は Mazon の scepticism にたいする著者の最後の回答と見ることができます。
- 4) La Geste にたいする批評は、出版時非常にたくさん出ましたが、ここでは A. Stender-Petersen, The Igor Tale, "Word", IV, 143 ff. New York, 1948 と M. Woltner, Die altrussische Literatur im Spiegelbild der Forschung, 1937—1950, Zeitschrift für slavische Philologie, XXI, 173 ff. Heidelberg, 1952 だけをあげておきます。

翻訳にあたっては、La Geste に入っている Jakobson 自身の現代ロシア語訳、Grégoire のフランス語訳、Szeftel の註釈、更に Poggioli のイタリア語訳、V. P. Adrianova-Peretc が監修してソ同盟科学アカデミーから出した校訂本¹⁾にのっている D. S. Lixačev の現代語訳などを参照しました。又措辞の点では神西清さんの文語訳²⁾から教えられた点が少くないことをおことわりして、感謝の意を表したいと思います。

なお註は、訳者自身の研究が未だ足りませんので、La Geste の著者たちの考えを紹介することを主にし、異説をすべてあげてその適否を論ずるといふようなことは故意に避けつつもります³⁾。

オレークの孫、スヴァトスラーフの子、 イーゴリの征旅の物語

1. はらからよ、かのイーゴリの、スヴァトスラーフの子、イーゴリの、苦難にみてる征旅の物語は、すぎし昔のことばもて語りいずるこそふさわしい。
2. さはあれ、われら、この歌をば、今の世のまことのままにはじめよう。ボヤーンのひそみにはならはずに。
3. げに、かの神人ボヤーン、ひとのほめ歌つくろうとすれば、そのおもいは木々をつたい、灰色なせるおおかみのごとく地をはしり、ぬれ羽色なすわしかとばかり雲の下をとんだ。
4. みずから曰く一ありし世のいくさのさまをしのびつつ、十羽のたか、白鳥の群にはな

1) Slovo o polku Igoreve, pod redakcij V. P. Adrianovoj-Peretc, izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR, Moskva-Leningrad, 1950.

2) 河出書房版、世界文学全集古典篇、XXVII、東京、1954.

3) 本文の註に出る略字の意味は次のとおりです。

P=1800 年出版の初版 (editio princeps).

A=1795/6 年に Ekaterina II の為につくられたコピー (いわゆる ekaterininskaja kopija).

J=R. Jakobson 校訂のテキスト (La Geste du Prince Igor', pp 38—78, ないし R. Poggioli, Cantare della gesta di Igor, pp 88—196).

本文の註

1. 「イーゴリ」—Igor' Svjatoslavič, Oleg Svjatoslavič (“Gorislavič”) の孫、Novgorod-Severskij の公 (1179—1198), 後に Černigov の公 (1198—1202).
- 2-3. 「ボヤーン」—Bojan. 「神人」と訳した原語は veščij 「予言の力をもつ」「魔力のある」= “devin, prophétique, sorcier” (La Geste, 341). Bojan の名は、早くからロシアのみならずチェック、ポーランド、南スラヴ諸族の間に用いられていますが、Turc 諸語の bajan=“rhapsode, enchanteur” からの借用語ではないまでも、語形意味ともに、その影響をうけていることはたしかです。Cremona の Liutprand (920—972) の年代記に出てくる、魔術によつて「おおかみやその他の動物にただちに形をかえることができた」というブルガリアの王子 Benjamin の名が Bajanus となつていることも決して偶然とは思われません (La Geste, 339 ff, 及び K. H. Menges, The Oriental Elements in the Vocabulary of the Oldest Russian Epos, The Igor' Tale, Supplement to “Word”, Monograph No. 1, New York, 1951, 16 f. 参照)。なお Slovo の冒頭の部分とヒザンツの Konstantin Manasses の年代記 (ca. 1144) の一節とのいちじるしい類似 (Slovo の詩人が Bojan を引合に出したように、Manasses は自らを Homeros にくらべています) については、すでに A. Orlov も指摘していますが、La Geste, 291 ff. はこの類似の意味するものが何であるかを更にくわしく論じています (ほかに R. Jakobson, “Speculum”, Vol. XXVII, No. 1., op. cit. 62 f. 参照)。
4. 「そのたかのとらえし白鳥」J который (PA который) дотечаше の который は который (Gen. sg. fem.) ととるべきです (La Geste, 7, 150).

- てば、そのたかのとらえし白鳥、まっさきかけて歌をうたった。
5. まことは、はらからよ、ボヤーンは十羽のたかを白鳥の群にはなったのではない。神通力あるその指がいのちある絃にふれるや、弦おのすから鳴りいでて、公たちのほまれをかなでたのだ。——そのかみのヤロスラーフの、またカゾークの軍兵どもの前でレデージャをたおしたいさましいムスチラーフの、あるは又スヴァトスラーフの子、美丈夫ロマーンのほまれを。
 6. はらからよ、でははじめよう、そのかみのヴラジーミルから、たじろかぬ剛勇もておのが知恵をためし、たけきいさおしもておのが心をといだ今の世のイーゴリまでの、この物語を。
 7. かのイーゴリこそ、雄心やみがたく、ロシアの国のため、たけきつわものどもを引具して、ポーロヴェツの地に攻め入ったのだ。
 8. その時、イーゴリ、あま照る日かげをうちあおぎ、そこより発するくらやみ、なべてのつわものどもを押しつつむのを見た。
 9. して、イーゴリは、従士らにむかい、かく言った。
 10. «わがはらからなる従士らよ！ 生きてとらわれの身となるよりは、敵のやいばにかかって果てるこそわれらがのぞむところ！
 11. はらからよ、いざおのがじし駿馬を駆って、水あおきドンの流れを見に行こう！»

5. 「そのかみのヤロスラーフの…」(старому Ярославу…) 以下、この節のおわりまでの部分は、周知のごとく、PA とも 4 のおわりにあります。J がこの部分をここへ転置したのは「この方が脈絡がととのうし、それに Zadonščina のすべての version がこの転置を支持するから」だと云います (La Geste, 81)。

「ヤロスラーフ」—Jaroslav Vladimirovič (“Mudryj”), Kiev の公 (†1054).

「ムスチスラーフ」—Mstislav Vladimirovič, 前者の兄弟, Černigov 及び Tmutarakan' の公 (†1036)。この公と Kasogi (Čerkesy の一部族) の将 Rededja との一騎討ちについてのエピソードは Ipatij 年代記 1022 年の項 (除村吉太郎訳「ロシア年代記」第 3 版, 東京, 1946, 103 f.) にのっています。

「ロマーン」—Roman Svjatoslavič, Tmutarakan' の公 (†1079), Jaroslav Vladimirovič の孫。

6. ヴラジーミル—Vladimir I Svjatoslavič (†1015).

отъ старога Владимира до нынѣшняго Игоря—同じような formula が Zadonščina 及び Slovo o pogibeli russkija zemli に発見されることはすでに古くから注意されていますが、Jakobson はこの三つの箇所を比較検討して、Slovo o polku Igoreve では、元來 отъ старога Владимира と、その前の повѣсть сію との間に [запе же болѣзнь княземъ о земли руской] という句があったのではないかという仮説を立てています。もしそうだとすれば、冒頭から до нынѣшняго Игоря 迄は英語ならば Let us begin, then, brethren, this tale [for the anxiety of the Princes for the Russian land has endured] from Vladimir of old to Igor of our day というふうに訳されるわけです (R. Jakobson, “Speculum”, XXVII, 1, op. cit. 60 f.)。

「おのが知恵をためし」—J (=P) истагну умъ (А умъ)=искусил ум (La Geste, 182). なお A. Obreńska-Jabłońska のポーランド語訳 (Słowo o wyprawie Igora, 112) も同じような解釈をとっています (“zahartował umysł”).

7. 「ポーロヴェツの地」—zemlja Poloveckaja. Ipatij 年代記 1152 年の項 (除村訳前掲書 386) によれば Volga と Dnepr の間のステップを指すようですが、Slovo では J 18 が示すように Sula を境としてその西が「ロシアの国」“zemlja Russkaja”, その東が zemlja Poloveckaja と考えられています。

8. 「そこより発するくらやみ」—1185 年 5 月 1 日水曜日の日食を指します。

12. 公の心は渴望に燃え、大ドンにまみえんと悲願に、天の凶兆も色あせるばかり。
13. ことばをついで、「ロシアの子らよ。余は汝らとともに、かのポーロヴェツの野末に槍を折ろう。わがかぶとに汲んで、ドンの水をのみほすか、さらすばかりにわがこうべをさらすのだ!」
14. ああ、ボヤーン、とおい昔の夜うぐいす。もし汝、夜うぐいすよ、心の木々をとびかいつつ、かの勇士らがいくさのさまを歌いしならば。もし汝、今の世のまわりにほぎ歌編みつつ、知恵もて雲の下をかけり、あるは又、野をこえ、山をめざして、トロヤンの道をはせ行きしならば。
15. かの人の孫は、イーゴリのほまれを、かくも歌うべきだろうか。
16. «ひろ野をこえてとび行くは、あらしに追わるるたかならず。群なせるからず、大ドンへとひたに走る»
17. あるは又、かくも歌い出すべきか、神人ボヤーン、ヴェレスの孫よ。
18. «馬はスラーのかなたにいななき、かちどきの声はキエフにとどろく。らっぱはノーヴゴロトにたかなり、旗じるしはプチャーヴリに立つ。イーゴリ、愛弟フセーヴォロトを待つ»
19. 荒れ牛フセーヴォロトは、イーゴリにむかい、かく言った。
20. «ただひとりなるわがはらから、ただひとつなるわがあかるきひかり、汝イーゴリ。われらは二人ながらスヴァトスラーフが血をうけし子。
21. はらからよ、いざ駿馬に鞍おけ。

12. 「公の心は渴望に燃え」—J (=P) спала князю умъ (А умъ) похоти=спрал у князя разум в пылом желании (La Geste, 182), 即ち спала は съпалати の aorist と解する訳です (La Geste, 240, R. Jakobson, "Speculum", XXVII, 1, op. cit. 51)

14. 「トロヤンの道を」—въ тропу Трояню. 周知のごとく、古くから Slovo 研究者たちの頭をなやまし続けている箇所の一つ。M. Szeftel (La Geste, 101 f.) は A. Veselovskij の説をとり、troja Trojanja は「Troia 人の地域に至る道」の意味に解しています。フランクの年代記の一つ "Gesta regum francorum" は、Azov 海沿岸に Troia 人の子孫がいたとしており、Veselovskij はこの記事を、Polovcy のくる前に Donec 流域にいた Turci (ないし Torci) の名が Homeros の伝説の Teucric と混同された結果だと考えました。更に La Geste によれば、アラビア人の地理学者 Idrisi が 1154 年につくった世界地図 Charta Rogeriana には、Dnepr と Don の間の「Polovcy の地」に Troia という町がのっているといっています。これらの事実を考えあわせるなら、Slovo の作者が Torci (=Teucric) のことを知っており、且つまた昔彼らがいた地方を舞台とする 1185 年の不幸な戦いの物語の中で、もう一つの悲劇的な戦い、即ち Troia 戦争のことを想い出しつつ、troja Trojanja ということばを使った、と考えてもあながち無理ではないだろう、と Szeftel は考えています。(従ってまた、J 57 сѣчи (РА вѣчи) Трояни も、La Geste は当然「Troia 戦争」と解するわけです。)

15. 「かの人の孫」—J того внуку. 「かの人」は Bojan を指し、従ってその「孫」は、「後継者」「弟子」の意味に解されます (La Geste, 102).

17. 「ヴェレス」—Veles (又は Volos), 家畜と詩の神。ギリシアの Apollon を想起させます。Lavrentij 年代記 907 年の項 (除村訳 前掲書 27) にその名が出ています。

18. 「スラー」—Sula, Dnepr の支流で、この河は前述のように Slovo では zemlja Russkaja と zemlja Poloveckaja の境界線になっていました。

「ノーヴゴロト」—Novgorod-Severskij.

「プチャーヴリ」—Putivl', Desna の支流, Sejm にのぞむ町。Igor' の長子 Vladimir がここに君臨していました。

「フセーヴォロト」—Vsevolod Svjatoslavič, Igor' の弟, Kursk, Trubčevsk の公 (†1196).

22. わが馬は、はやクールスクのほとりにて鞍おかれたるぞ。
23. してわがクールスクの郎党は、音にきこえたつわものぞろい。らっぱの下でむつきにつつまれ、かぶとの下のゆりかごにねむり、槍のほさきで物くらはされたる者ども。
24. いずこの道、いすちの谿とて、知らぬくまなく、弓をはり、えびらをひらき、つるぎをといで、今やおそしと出陣を待つ。
25. 野をはせめぐるありさまは、灰色なせるおおかみにことならず。われこそは、おのが名をあげ、公のほまれをかがやさんと、はやりにはやる》
26. かくてぞ、イーゴリ公、こがねのあぶみにもろ足かけ、ひろ野をのぞんで馬をすすめた。
27. 天日はくらくかげって、公の行手をさえぎりかくす。
28. 夜は雷鳴をとどろかせて鳥のねむりをさまし、けものはするどく鳴いて、百また百と、寝さめの鳥を追いあつめた。
29. ジフはこすえより声をかぎりにさけんで、知られざる国へと合図をおくる——ヴォルガの流れ、黒海のほとり、スラーの岸べ、スーロシュ、コルスン、さては又汝へ、トムータラカンの神像よ。
30. して、ポーロヴェツの軍勢は、道ならぬ道を急ぎつつ、大ドンさしてひきしりぞく。《イーゴリ勢、ドンにきたる》、兵車のさげびは深夜にこだまして、さながらとび立つ白鳥の羽音のよう。
31. 鳥ははやくもわざわいにさきがけて雲の下にかくれがをもとめ、おおかみは谷間にほえて人の心をおびやかす、わしはしきりにないてけものを骨にまねきよせ、きつねの群はロシアが勢の真紅の楯にほえかかる。
32. ああ、ロシア、なれははや、丘のあなた！

22. 「クールスク」—Kursk, Sejm にのぞむ町。

28. 「けものはするどく鳴いて」云々—J свистъ звѣринъ въ ста збп (=свистъ звериный их сотнями сигналь), Р (Аなし) свистъ звѣринъ въ ста збп (La Geste, 242, Jakobson, "Speculum". XXVII, 1, op. cit. 52).

29. 「ジフ」—Div, Lat. deus, Skr. devas, O. Pr. deiws などと同じくインド・ヨーロッパ基礎語 *deiws にさかのほることばのようですが (A. Meillet: Linguistique historique et linguistique générale, Paris, 1948, 326; 但し M. Vasmer, Russisches etymologisches Wörterbuch, I, Heidelberg, 1953, 350 は元来は Turc 語だと考えています), Avesta daēva などと同じく "esprit hostile et démoniaque" の意味をもつようになりました。ロシアの口碑では鳥の形をした怪物と考えられているといえます (La Geste, pp. 104, 356)

「知られざる国へ」—земли незнаемъ, 7 の「Polovcy の地」と同じ意味です。

「スーロシュ」—Surož クリミア半島にある今の Sudak.

「コルスン」—Korsun' (Xersones), 同じくクリミア半島にあるギリシア人のたてた町。

「トムータラカン」—Tmutarakan', ギリシア人のたてた Phanagoria のあとに 8 世紀ごろ(?) おこったこの町は, Lavrentij 年代記に 988 年から 1094 年迄しばしば出て来ます。代々 Ol'goviči の勢力範囲でしたが, Slovo が書かれた 12 世紀末には恐らく Polovcy の手にあったものと思われれます。「トムータラカンの偶像」というのは多分ここに立っていた非常に古い異教の神像の名残りを指すのでしよう。

31. 「鳥ははやくも」云々—J уже бо ся (РАなし) бѣды его пасеть птиць подоболочию (РА подоблю); вльци грозу ворожатъ (Р въ срожать, А въсрожать). подоблю を略字と見て подоболочию と読むのは Zadoňščina の corresponding passage にある подь облаки 及び bylina に出る同じ表現などを考えあわせた結果だといえます (La Geste, 82).

33. 夕ばえのひかりは空にたゆたいつつ、夜に入っていつしかきえた。
34. しののめのひかりが空を燃やすころ、野もせはもやにつつまれた。
35. 夜うぐいすのさえずりも今はまどろみ、からすのざわめきをよびさます。
36. ロシアの子らは、おのが名をあげ、君のほまれをかがやかさんと、ひろき野に真紅の楯をたてめぐらす。
37. さてもその金曜日の朝まだき、ロシアの子らはポーロヴェツの邪教の勢を蹴ちらし、矢とばかり野にとび散って、分どったは、うるわしきポーロヴェツのおとめら、さては又、こがね、ねり絹、あたいとうとき絹のびろうど。
38. ほろ、かっぱ、かわごろもなど、ありとあるポーロヴェツびとの衣裳をば、沼地や沢になげいれて、衣裳の橋をかけわたす。
39. くれないの旗、白たえの幟、緋いろの旌旄、しろがねの柄は、剛勇のほまれもたかきスヴァトスラーフの子に！
40. オレークの巢においたてる、たけきうからは野に眠る。げにはるけくもとびつるものかな。
41. まことや、このうから、世に生まれたは、たか、おおたかの、あるは又、汝、黒がらす、邪教のポーロヴェツびとの、えじきとならんためではなかった！
42. グザーは灰色なせるおおかみのごとく野をはしり、コンチャークは先導つとめつつ、もろともに大ドンさしてひいて行く。
43. そのあくる日の朝まだき、血の色の朝やけは夜あけをつげた。
44. 黒雲は海より迫って四つの日を呑まんとし、その中に青き稲妻しきりにひらめく。
45. やがておおいなるいかづちはおそいきたり、大ドンのかたより雨は矢となってふりそごろう。
46. ここにこそ、ポーロヴェツびとのかぶとにあたって、槍は折れ、つるぎはこぼれよう、大ドンにほどとおからぬ、ここカヤルイーの河のほとりに。

33-34. 「夕ばえのひかり」云々—J Длго (А Долго) ноч(и) (РА ночь) мръкнеть (РА,) заря. (РА.なし) Свѣтъ запала, 即ち РА の ночь を ночи (Loc. sg.) とし, заря を мръкнеть の主語と解し, свѣтъ をあたらしい文の最初におく訳です。古代のつづり方の習慣では, заря は「夕やけ」を, зоря は「朝やけ」をさします (La Geste, 317 f.)。なお запала は запалати の aorist と取ります (J12 の註参照)。

37. 「金曜日の朝まだき」—1185年5月3日, この日 Sjuurlij 河のほとりで Igor' 軍と Polovcy 軍の第一回の戦闘が行われました。Ipatij 年代記 1185年の項(除村訳 前掲書 476)参照。

40. 「オレークの巢においたてる, たけきうから」—Олгово (Р Ольгово) гнѣздо. 遠征にでかけた4人の公はすべて Oleg “Gorislavič” の孫 (Igor', Vsevolod), ないしひ孫 (Igor' の子 Vladimir, 甥 Svjatoslav) でした。

42. 「グザー」「コンチャーク」—Gza (又は Gzak) Burnovič, Končak. Polovcy の二人の Хан の名, なお Гзакъ бѣжить (Р бѣжить) は 30 の Половци...побѣгоша と同じく, 戦術的後退を意味するものと解されます (La Geste, 110)。

44. 「海より」—Slovo では「海」はたいていの場合 Azov 海をさしています (48 も同様)。

46. 「カヤルイー」—Kajaly. M. Szeftel (La Geste, 110 f.) は Don の河口に近いところで同じく Azov 河にそそいでいる Kal'mius 河を指すものと考えています。Slovo の語形は РА とともに当然 Nom. sg. Kajala (fem.) を想定させますが, Ipatij 年代記には на рѣцѣ Каялы とあり, 恐らく Slovo の失われたテキストでも同形の不変化名詞ではなかったかと Jakobson は考えています (La Geste, 325)。なお語源は K. H. Menges (op. cit., 28) の云うとおり, 「岩の多い」という意味の Turc 語でしょう。

47. ああ、ロシア、なれははや、丘のあなた！
48. 見よ、ストリボークのすえなる風は、海よりおこり、矢となって、いさましきイーゴリ勢のおもてを吹く。
49. 地はとよみ、河は濁り、塵煙は野をおおう。
50. «ポーロヴェツの勢いたる。ドンより、海よりよせきたる！», 告ぐる軍旗の声しきり。
51. 敵はあなたより、又こなたより、ロシアの勢をひしとかこんだ。
52. 悪魔の子らがときをつくって野をふさげば、いさましきロシアの子らはいくれないの楯を野にすきまなく立てめぐらす。
53. 不退転の意気すさまじき汝、荒れ牛フセヴォロト！ 汝の矢は敵陣めがけて雨あられとふりそそぎ、汝がフランクの剛刀は敵のかぶとにあたって憂然たるひびきを發す。
54. こがねのかぶとをきらめかせて、かの荒れ牛のはせすぎたあと、邪教のともがら、ポーロヴェツびとの首級はつんで山をなす。
55. 百鍊のつるぎの前には、アヴァールのかぶともなじかたまるべき、二つになってくだけ散る——さてもめざましい汝のはたらき、荒れ牛フセヴォロト！
56. はらからよ、かくてわがフセヴォロトはここを先途と斬りたてた。名誉も富も、チェルニーゴフも、父祖伝来のこがねの玉座も、いとしのきさき、うるわしのグレーボヴナがふかきなさけも忘れつつ。

48. ストリボーク—Stribog, Vladimir I Svjatoslavič がキリスト教に改宗する前にその偶像をつくった5人の神々の一人。Preobraženskij (Ėtimologičeskij slovar' russkogo jazyka, II. 398) は *сеющий, способствующий рассеянию семян* の意味であろうと云っています。

53. 「フランクの剛刀」—*мечи харалужными* (Instr. pl.). M. Szeftel (La Geste, 112) の云うように形容詞 *харалужный* のもとになった名詞 *харалугъ* は、古代高地ドイツ語 (Old High German) の *charolung* (=Carolingien, Français, Franc) から来たことはまずたしかであると思われまゝ。なお K. H. Menges, op. cit. 58 f. もこの考えにかたむいています。

56. 「斬りたてた」—*Д дая (Р кая) раны, (РА ,なし) дорога братіе* 即ち *кая* はもと *дая* (=дяти) の aorist, 3 pers. sg.) とあったのが筆写のさい誤ってこう書かれたものと考え、従って *дорога* は *братіе* にかかる形容詞 (Voc. sg. fem.) と解するわけです。なお A. Obrębska-Jabłońska (op. cit. 121) もこれを支持し、*“to wygląda na najprostsza interpretację tego ustępu”* と云っています。

チェルニーゴフ—Černigov の町は代々 Ol'goviči の父領でした。

グレーボヴナ—Glebovna. Vsevolod の妃 Ol'ga は Perejaslavl' の Gleb Jur'evič の娘でした。